

草庵仏教

第150号
(発行日)
2002年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2-7-20
電話・FAX(0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimyuu3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

ニヒリズムをこえて

N 「人間は何のために生まれ、何をもっとも大事なものとして求めたらいいのか、現代の日本人はわからなくなってきたように思います」

D 「この問題は有史以来、人間に課せられた根本的な問題です。けれどもこの問題が今日ほど、モロに突きつけられている時代はないといえましょう」

N 「一般に私たちは「なぜ生きねばならないか、生きる意味は何か」というような問いをもつことはせず、もとうとする問題が重すぎるため、そういう問いを避けているのかもしれない」

D 「もたなくても生きていけま

N 「何のために生きるかなんて考えなくても、とりあえず生きられるのは確かですね。なにしろ楽しいことが結構ありますから。生きる意味はわからなくても、ビールを飲めばおいしいし、

焼き肉を食べればうまい。温泉にゆつくりつかれば気分はいいし、観光名所を旅するのはおもしろい。こういうことは理屈はどうあれ、今すぐに確かめられる楽しみですね。そういう楽しみがゴロゴロしている現代ですから、人生全体の意味はどうあ

れ、こういう楽しみを享受することは「とりあえず生きる」理由になります」

D 「そうですね。ふりかえってみますと戦後の日本人が何を求めて生きてきたかを一言でいえば、「楽」と言えるのではないでしょう」

N 「終戦後の廃墟の中から、懸命になって働いてきた日本人の求めてきたのが「楽」だということですね」

D 「ええ、私たちの親なども生活が楽になるようにこんかぎり働いてきました。この場合の楽は経済的に楽になることが主です」

N 「経済的に楽になって、洗濯機とか自動車とかクーラーとかを買えば、身体も楽になりますしね」

D 「ええそうですね。「楽」は他にも、テレビ、映画、音楽、観劇などの芸能や、パチンコ、麻雀、ゴルフ・テニスなどのスポーツ、あるいは旅行やグルメやカラオケなどの娯楽・享楽などですね。セックスは快楽です」

N 「釣りや盆栽や社交ダンスや作陶や刺繍などは趣味・道楽でしょう」

D 「こういう風に並べますと、いわゆる「生活が楽になる」を中心に、さまざまな娯楽・享楽

・快樂・道楽など、いわゆる「楽」を求めてきたのが私たちではないでしょうか。昔は「む、うつ、かう」なんていいましたが、飲むは飲食の楽しみに通じ、打つは賭けごとですからパチンコ・競馬・麻雀などのギャンブルに通じ、買うは性的快樂でしょう。今も昔もこうした点は変わりません」

N 「人間は「楽」を求めるだけではないのでしょうか」

D 「楽を求めるのは人間の自然な傾向ですが、凡夫はとかく楽に執着し楽ばかりを求めてしまっています」

N 「楽だけをおっかけていく人生はどうなるのでしょうか」

D 「そういう人生は深い充足がなく、中身が空虚な人生に陥ってしまっているのではないのでしょうか。京都のある病院長さんが、「昔のご老人は一本骨の通った気骨と味のある方が時々おられたが、今は病院にたくさん老人が来られるけれども、中身の無いカスカスの老人があまりにも多すぎるとおっしゃっていました。このお話は「楽」だけを求めていくと中身の無い人間になるといってお話のように私には聞こえてきました。私にとって他人ごととは思えません」

N 「楽だけ求めていると人生は虚しくなるということですね。では人生は「楽」だけではなくて根本的に何を一体求めればいいのか、それがわかりません。いわゆる生きる目的がハッキリわかりませんね」

D 「これは大変な問題です。生きる目的は何か。いいかえれば生きる意味は何かといつてもいいでしょう」

N 「人間は何のために生きるのか、生きねばならないか。それを考えてもわからないしハッキリもしない。また分かつてもいいというのが本音なのかもしれません」

D 「生きる意味をわかつてもいいし、わからなくてもいいと思ってしまう。人生には真剣に尋ね、求めるような意味などは無いと意識的あるいは無意識的に思ったり、感じたりしている」

*

N 「ええ。心して求めなければならぬような人生の目的など無いのではないか。あつたとしても私には必要では無いと思ったり感じたりしているのが私たちの実状だと思えます」

D 「そういうのをニヒリズム(虚無主義)というのでしょうか。本人はニヒリズムとはほとんど意識していませんが。今日の日本社会はあえていうとニヒリズム社会といつてもいいと思えます」

N 「ニヒリズムが社会に蔓延し

ているということですか」

D 「ええ。要するに、人生には心して求めるべき永遠の価値あることを認めないし求めもしない。このことに関して聖人は『教行証文類』に次のような『浄土論註』の言葉をご引用になっています。」

『仏無し・仏の法無し・菩薩無し・菩薩の法無しと言わん』

(真理を悟った人(仏)などはいない、その人が説く真理などというものはない。真理を求める人(菩薩)を認めない、菩薩がよりどころにしている教えを認めない)

こういう考えをニヒリズムと書いていいと思います」

N 「ニヒリズム的な生き方でも、結構みんな生きてますね」

D 「それは先ほど申しましたように(楽)がたたくさんあるからでしょう。ですから真理などという難しいことをいわなくても、あるいは人生の意味や目的がわからなくてもとりあえず生きられるのですね」

N 「さまざま(楽)はお金と健康がなくては享受できませんから、お金と健康には非常に心が強いし配慮してやまないというわけですね」

*

D 「ええ全くその通りです」

N 「ただもう一つ気がかりなのは(楽)があふれているニヒリズム社会の日本でどうして自殺

が多いのでしょうか。年に3万人以上の人が死んでいます。自殺未遂や自殺願望の人を入れると相当な数になります」

D 「これは不思議なことではありません。ある意味で当然なことだと思います」

N 「なぜですか」

D 「(楽)を求め、それを追っかけていく人生ですと、もし災難や困難にあうと、それに耐えることができなくなって自殺に走るといふことになると思います」

N 「具体的にいつてくください」

D 「今度の震災の後で、多くの人が仮設住宅ですんでいました。その状況をテレビ局のあるレポーターが取材をし、そこで生活している人をインタビューしている映像をたまたま見たことがあります。その時、被災者のお一人が(妻を失い、家も家財道具も失ってしまい、私も大ケガをしました。どうしてこんな辛い目をしてまで生きていかなければならないのか)と語っていました。財産を失ったり、健康を失ったり、職を失ったり、恋人に捨てられたりして、大変辛い目をする(こんな辛い目をしてまでどうして生きねばならないのか)という思いが湧いてくるのも無理からぬことです。」

そういう場合、(楽)をのみ求めてきた人は、楽を求めたのに苦勞や災難が続くと、大きな苦しみをかかえたままで生き続ける理由がなくなってしまう、生き

抜いていこうというエネルギーが出てこなくなるのではないのでしょうか。もしもいろんな苦勞や困難があっても(生きることに十分な意味)を見いだしているなら、苦難や苦勞に耐えているのではないのでしょうか」

N 「苦しいことであつても、生きるに意味を感じている人は苦しみに耐えやすいけれど、楽を求めているのに逆に苦しみが与えられてしまうなら、生きる

ことがイヤになり、やりきれなくなつて、自らの命を絶つことになりかねないのですね」

D 「ええ。ですから楽だけを求めて、生きる本当の意味を見いだすことのないニヒリズム社会には自殺が増加するのはわけありということですね」

N 「わかりました。さきほど楽ばかり求める人生は虚しいというお話でしたが、空しく虚しい人生は中身が無いという意味ですね」

D 「ええ、長生きしても豊かな実のりが無い人生のことなのです」

*

N 「そうすると人生を本当に豊かに充実させるものは娯楽や享樂や快樂や氣樂さなどの(楽)ではないとしたら何なのでしょ

うか」

N 「よく(空虚な人生)に対して、(まことの人生)といわれたりしますね」

D 「だいたい、真実という漢字の語源的な意味からも、それがうかがえます。広辞苑で調べますと、真の旧字は眞ですが、眞の語源的意味は、容器にさじで中身をみたく意だそうで、そこからまこと、ほんものという意味がでてきます。また(実)の語源的意味は、家の中を財貨でみたくという意で、そこから中身がいつぱいある、十分にみちる、いつぱいにみたくという意味がでてきたということですよ」

N 「なるほど、真実という言葉は真も実も、入れ物の中身をいつぱいに満たすという意味が語源にあるのですね。そうすると人生という入れ物、私という入れ物をみり豊かに充実せしめるもの(真実)を一人一人の人生を根底から充たすのですね」

D 「そういうことですね」

*

N 「ではその真実とは何でしょう

うか」

D 「真実とは何かについては思想や宗教の上でさまざまにいわれてきました。それについてはここでは論議せず、ただ親鸞聖人はどういわれているかをご紹介します。『教行証文類』には『涅槃經』の言葉が引用されています。」

『真実というは、すなわちこれ

如来なり。如来はすなわちこれ真実なり』

真実というのは如来であるといわれています。真実とは阿弥陀如来のことです。ですから真実にふれるというのは阿弥陀如来にであうことです。如来にであうと人は根底からみたまされる、なぜなら如来は真実だから」

N 「そうすると、生きる本当の目的は(楽)を求めることではなくて真実を求めること、すなわち如来を求め、如来にであうことであり、それが生きる意味なのでですか」

D 「要をいえばそういつていいのでしよう。如来にあり、如来によつて生きる人生がまことの人生であるといえましよう」

N 「では如来にであうとはどういうことであり、どのようにすればあえますか」

D 「これが当然次の問題になりますが、別の機会にもうしましょう。いずれにしても(楽)を求め、そのためにお金と健康を主眼に生きる人生は空しく過ぎゆく人生であり、真実を求め真実にあうことによつて人は本当に充足する。そういう生き方をこそ望みたいものです」 (了)



聖典講座

『歎異鈔』第十二章第七講

いまの世には学文して、ひとのそしりをやめ、ひとえに論義問答むねとせんとかまえられそうろうにや。学問せば、いよいよ如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかが、なんとあやぶまんひとにも、本願には善悪淨穢なきおもむきをも、とききかせられそうらわばこそ、学生のかいにもそうらわめ。

(歎異抄第十二章より)

現代語訳(このごろは、学問をして他の人が誇るのをやめさせ、議論し問答することこそ大切だと心がけておられるのでしょうか。学問をするのであれば、ますます深く如来のおこころを知り、本願の広大な慈悲のおこころを知って、自分のようなつまらないものは往生できないのではないかと心配している人にも、本願においては、善人が悪人か、心が清らかであるかないかといったわけへだてがないということを読き聞かせてこそ、学問をするものとして値うちもあるでしょう。)

《語意》

学文(学問)

論義問答(問答を交わして法門の道理を明らかにすること)

悲願(慈悲の願い)

淨穢(心の清らかな人とけがれた人)

学生(学者)

*

従来から仏教の学問をするのは何のためかといえ、それは自利利他のためといわれてます。自らが菩提を求め、また人をも菩提へ導くために仏法の学問がなされるのであって、他の宗教と論争し勝つためというのは横道にそれた学び方があります。

だいたい「学問をする」ことは大事なことです。とかく学ぶ人間の側に煩惱がとまらないやすいものです。

昔から「名利の修学」と批判されているように、名声を得るため、そしてそれによって経済的な利益とか社会的な地位の向上を得るために学問に志すことが多いのです。それが世間の学問においては、まだしも、煩惱を超えていく道である仏道において、名利を得たいという煩惱混じりの動機で仏教の学問をするのは浅ましいことでもあります。

宗教学者の中沢新一氏が「勉強が好きで人間たちには此の自己愛というものが原動力になっているところがあります。知識欲は自己愛だと思えます」「宗教の解体学」と話しておられますが、そうかも知れません。知識をもつと得ようとして本を読む心にも、自己愛があるとわかれると、否定できません。人の知らないことを多く知って人よりも優位に立ちたいという我愛の心があるのでしよう。そこにも名利の煩惱がおこっているといえます。

*

浄土の学問は自身の救いのためだけでなく、弥陀の本願を知らない人びとのため、あるいは弥陀の本願に対してまだ不審や惑いをもっている人びとのために、

本願のお心の真義を明らかにするためのもので。本願には善悪淨穢なきおもむきをあきらかにし、万人を平等に救う広大な大悲の救済活動が本願力であることを正確かつ明白に説くための学問であるべきはずであります。

ということはお念仏のみ教えにであつても、なお自分の心や行いの善し悪しにまどつたりこだわったり、あるいは職業や身分の淨穢にまどわされて、弥陀の本願を受け入れることが出来ない人びとが多かったのです。

*

内面の煩惱を問題にして、「私のような欲や怒りやねたみ心のやまぬ者がお念仏申すばかりで浄土に生まれさせてくださるというのは、理屈にあわぬことのように思われる。たとえ阿弥陀様は慈悲深くても、修行もせず煩惱たれ流しのようにな私ではとてもお救いにはあずかれまい」と疑問をもつ人たちがいました。

また法然聖人の当時、盗賊とか殺を行わざるをえなかった武者とか遊女といった人たちが法然上人のお話を聞いて念仏者になりましたが、彼らは「私のような罪深いものでも助かるのでしょうか」と法然聖人に問うています。

それに加えて、中世の身分制社会においては、獵師や商人や漁師や河原者などの低い身分に置かれた人たちは不淨な人と見られたり、自らもそのように不淨な身と思ひこんで、「私のようないやしい身分のものは阿弥陀様のお助けにはもれるのではなからうか」などと惑う人びともいたろうと思ひます。

こういう人びとに「本願には善悪淨穢なきおもむきをも、とききかせ」ることが浄土の学問を学んだ者のつとめであり

ましよう。聖人もご消息に

「わが身のわるく、こころのわるきをおもいしりて、この身のようにてはいかが往生せんずるといふひとにこそ、煩惱具したる身なれば、わがこころのよしあしをば沙汰せず、むかえたまうぞとはもうしそうらえ」と述べておられます。

このような、本願の思し召しを受けとれずまどうていた人たちに、弥陀の本願は善悪淨穢を一切選ばず、煩惱に妨げられず救済したもうという不可思議の大悲の思し召しを正確にあきらかに人びとに示すためにこそ浄土の教を学ぶ甲斐もあるというものです。

*

なお、阿弥陀仏は淨穢を選びたまわらない、という思し召しは、淨穢によって縛られている人びとを解放していきま

まず淨は煩惱の浅い人、あるいは少ない人を意味し、穢は煩惱の盛んな人、深い人を意味します。淨を選びとり穢を選び捨てたりしないのが弥陀の願心であります。

さらに社会的な面から見ますと、淨とは社会的身分での貴族や高位の僧侶などの「いみじき」人、「尊い」人をいい、穢とは莊園農奴や獵師や漁師や商人や河原乞食などの社会的身分の低い人たちを意味しているとうかがえます。

弥陀の救いはこのような社会的身分によつて人を分けへだてしたまわらないことを告げ知らせていますし、それは同時に、従事している職業に淨穢を付けて人を差別されないことを意味していました。

*

この阿弥陀仏の絶対平等の大悲心は、

仏の智慧の眼であります。この仏のものの見方ないしは人間観は、必然的に本願に触れた人のものの見方・考え方に影響を与え、念仏に触れた人びとの価値観を変革していきました。「人間は本当は平等なのだ。人間の身分などというものは、この世の仮の規定にしかすぎない。人間はどのような職業にしようかと一様に仏様から平等に見られているのであって、職業に貴賤はなく、従事している職業によって人間を淨穢で差別することは仏様の平等な大悲のお心とは裏腹だ」という見方、感じ方、思想を人びとに定着させていきました。

これは、身分差別によって民衆を支配しようとする支配者や権力者にとつてははなはだ都合の悪い見方であり、念仏者たちはやっかいな存在とされ、また恐れを感じさせました。あの一向一揆はそういう真宗の平等思想に養われた民衆と身分制と武力によって支配しようとした勢力との衝突という面をもっていました。

*

話はかわりますが、今日では「いやしき身にて往生はいかが、なんととあやぶ」む人がきわめて少なくなつたように思います。欲を起こし続け、怨みや妬みの煩惱の起こる我が身を「なんと浅ましい我が身であることか」と悲しみ、「こんな心の私をどうしましょう」と嘆く人もごく少ないように思います。人として生きる浅ましさを痛ましく感じることも少ないのです。それゆえ「こんな煩惱の深い、浅ましい私のような者でも救われるのでしょうか」というような惑いをもつこともなくなつてきています。

自分のどうしようもなさとか心の醜さとか生き方のお粗末さとか情けなさとか

かが問題になり嘆きになり辛さになる、そういう悲しみにおいて「一切の善し悪しを問わずに撰取したもう」弥陀の本願は感受されるのではないのでしょうか。けれども、浅ましい我が身を愧じかつ悲しむことがないところ、罪を感じることはないところ、そういう「ケロッ」としているところに本願の大悲は感じられがたいのではないのでしょうか。

*

よく「真宗は衰えた」といわれますが真宗そのものに盛衰はありません。それには、なるほど真宗の真実を言語化した真宗教義が現代という時代に十分マッチしていないという一因はあるでしょう。しかし、教義面におとらず、私たちが自らを問題にし、また問題にならざるをえない我が身をいとい悲しむことが大変希薄になっていきます。このことが真宗を受け入れにくくしているのではないのでしょうか。

*

反面、現世利益をもつばら説く宗教は盛んです。「もつともうかりたい」とか「病気がなおりたい」とか「災難がこないように」とか「ころつとしにたい」とかという人間の欲求を直接にかなえましようという宗教がはやるといふことは、裏から見ると、人間における自己批判の精神が弱まっていることの現れだと思えます。「もうかりたい」という思いに自分の貪り心を感じ、災難が来ませんようにと神仏に祈る中に自分の都合ばかりを優先させている自我心を見、ころつと死にたいという欲求の底にどこまでも自分の都合良く生きたいというわがままを見る

とき、「なんと私は自分の思いをかなえよう」とばかりしているのか」と、自我を

批判する、そういう眼を失っているといえます。現世利益の宗教の繁盛は外にばかり目が向いているしとはいえないのでしょうか。

*

末法の時代は五濁の世であるといわれています。五濁の中に衆生濁というのがあります。それは釈尊在世から時代が下つてくると人間の感性がますます濁ってくるというのでしよう。

その濁りとは、悪を為して愧じず、煩惱を起こして何とも思わず、自分のおぞましさを嘆くこともなく、いつもケロッとしているような常態を衆生濁といっているのでしょうか。それは人ごとではありませぬ。私どもの日常意識にさえなっているように思います。

*

そういう人間をどこまでも、あきれもせず、見放しもせず、どこどこまでも照らし続けてくださるのが、無量光の阿弥陀様であります。阿弥陀仏のお心は逃るものを追っかけるようにして私どもを救おうとしてくださる。その光明のお照らしにうながされて、我が身の悪が知らされてくるのであります。ウソもいつわりもへつらいも欲もいかりもねたみもくしみも、他者の話ではなく私自身の心の内容であると知らされてくるのです。自らの煩惱の深さを知ることを通して、弥陀の本願が「このわたしのためでありましたか」と、弥陀の大悲のご恩を知らせていただくのです。

それは同時に煩惱を悲しみ、悪をいとい離れようとの願いともなつてくださるのでありましよう。